高校生部門　愛知県最優秀賞

「聾者と健聴者が共存する社会」

愛知県立名古屋聾学校　高等部一年

村松　楓華

聴覚障碍者としての私が抱く、日常生活への願いや思いを二つ掲げたい。

一つ目はマイノリティに対する差別だ。これは黒人やジェンダー、障碍者全体に対する差別に繋がるものだ。皆、同じ地球上に住む人間であるにも関わらず、一部の人が差別に苦しむのは理不尽ではないか。私には理解出来ない。現在、各国で差別を解消する法律や条例が定められているが、それでもなお、差別が減っているという実感が出来ない。差別が完全に無くなるのは、まだまだ先のことなのだと思う。一方だけに偏った「優しさ」は、他方にとっての「優しさ」ではない。それが自覚できていないのだろう。ニュースで差別に関する記事を見ると、人間が嫌いになりそうなことがある。真の意味で平等な世界を私は強く望んでいる。

二つ目は聾者への対応の設備についてである。分かりやすい事例として、コンビニが挙げられる。レジカウンターに「耳が聞こえない人はさしてください」というシールが貼ってある。レジ袋が必要か、スプーンやフォーク、割り箸は欲しいか、商品を温めて欲しいか等々が書かれている。これを見始めたのは最近である。コンビニ以外の店では筆談の対応が整っている店もあるが、まだまだその数が少ないのが現状だ。無理にとは言わないが、ある程度の準備をして貰えるとありがたい。それを心底、願っている。

日常生活の中で考える様々な案件とは別に、最近嬉しいと思う瞬間が増えたこともまた事実だ。

それは手話や指文字に興味をもってくれる人々の存在だ。以前にファミリーレストランに友達と行った際、手話で話している我々に店員さんが気付いたのであろう、注文した商品を届けてくれた時に手話で「ありがとう」と伝えてくれた。その時、私たちは非常に驚いた。それと同時に、大変嬉しくもあった。また別の日には、学校の近くのとあるお店で、一部の店員さんたちが手話を使っているのを見かけた。更には筆談も用意してくれていて、非常にありがたく思った。このように、手話や指文字に興味をもってくれる人々は街中のレストラン等々だけでなく、ＳＮＳでも見かけるようになった。これは最近、聴覚障碍者や手話に関係するドラマが多い影響ではないかと考えている。手話や聴覚障碍者そのものがクローズアップされ、認知が高まっていくのは、私達にとって、大変喜ばしいことでもある。

また、テレビのコマーシャルにも字幕が付くことが増えている。最近のこの傾向について、私は母に言われるまで気が付かなかった。確かにコマーシャルの言わんとする内容がいまひとつ聞き取れないときが時々あった。しかし、字幕が付くようになった今、コマーシャルの内容が明確に理解出来ている。コマーシャルとは、良いポイントを人々に広く宣伝する為に存在するものだ。障碍者だけに伝わらないのでは、その意味を成さない。他にも、ＤＶＤ鑑賞時のメニュー選択画面も同様で、字幕付きやガイド付きといったものが設定されるようになった。

このように以前と比べ、日常生活の中でバリアフリー化されたと感じるものは多い。該当者以外には気付かれにくい小さな変化かもしれないが、こういった積み重ねがいつしかきっと、誰もが幸せに暮らせる社会に繋がるものであると私は確信している。